

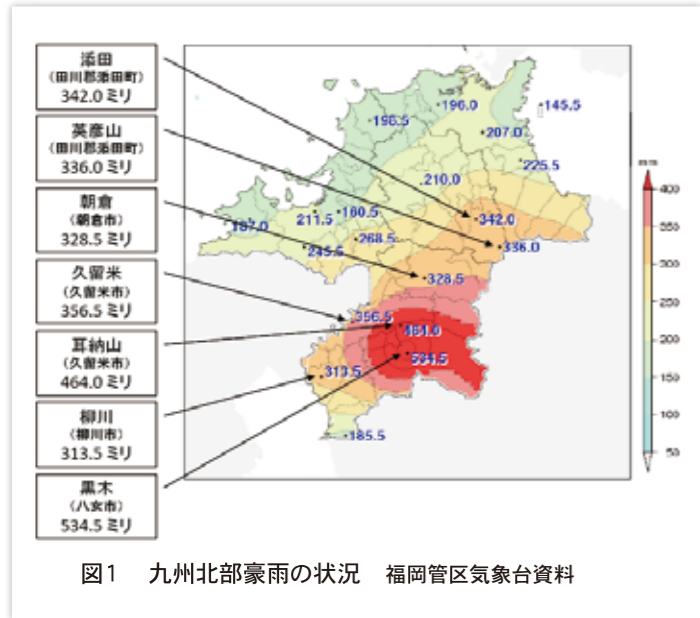


発行 矢部川をつなぐ会
HP http://www.yabegawa.net/
Blog http://yabegawa.jugem.jp/
発行責任者: 松富士将和
事務局/山村塾・小森
〒834-1222 八女市黒木町笠原
9836-1 えがの森内
山村塾気付
TEL/0943-42-4300
mail/info@yabegawa.net

第6号

~矢部川新聞は「山から海まで未来につなぐ 矢部川をつなぐ会」が発行する流域の情報誌です~

矢部川大水害から半年が経った。
矢部川をつなぐ会 会長 松富士将和
半年経って、ライフラインは一応回復したが、道路は、星野や笠原に至る幹線道路はまだまだ長い時間がかかりそうである。上陽のめがね橋や破壊された堰・唐ノ瀬堰や崩れ落ちた廻水路・込野廻水路などは何時になるか目途が立たない状況にある。



が短期間に集中して降り、崖崩れや河川の氾濫などの大きな被害が生じた。しかも耶馬溪や日田では、2度も3度も襲われるなどの悲惨としか言いようのない被害を受けた。矢部川流域でも、局地的な豪雨が耳納山地の北東部・矢部側に降り、矢部川本流よりも支流・星野川や笠原川などに大きな崖崩れが多発。滑り落ち、崩れ落ちた土砂が川を堰き止め、流れ出した杉丸太が川を塞ぎ、護岸壁や橋梁、堰などを壊し更なる氾濫を起した。

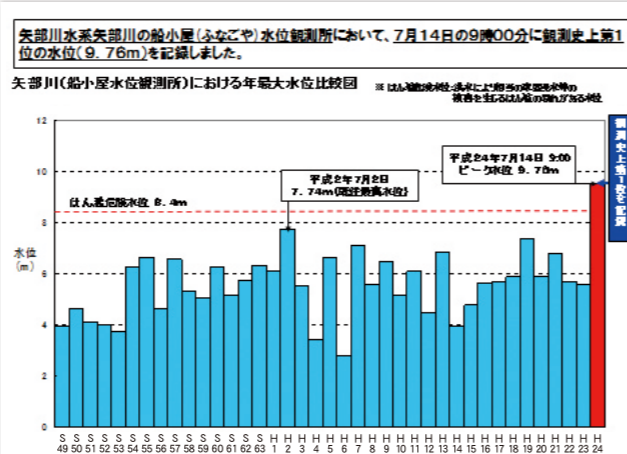


図2 水位の概要 提供: 筑後川河川事務所

Table with 2 columns: Category (e.g., 人的被害, 住宅被害) and Details (e.g., 死者2名, 負傷者10名).

表1 八女市における被災状況

九州北部豪雨の状況 福岡管区気象台資料
\*黒木観測所において1時間雨量94ミリ、3時間雨量183ミリ、累加雨量564ミリを記録したほか、3観測所で最多の雨量を観測した。

矢部川水害といえは二ツパチ・昭和28(1953)年6月25日、26日がある。矢部川流域でも上流部を中心に豪雨が降り、八女郡矢部村(八女市)で2日間の日雨量が395ミリ、5日間に934.2ミリの総降水量を観測したのを始め黒木町(八女市)で609.5ミリ、星野村(八女市)で667.8

笠原地区 災害当時の様子と復興支援

山村塾 笠原復興プロジェクト 山村塾事務局長 小森耕太



7月14日の豪雨災害以降、本当に多くの方々に応援いただいている。12月末までに災害ボランティア延べ2,110名、活動日数89日間。笠原復興基金286件7,058,308円のご支援を頂いた。おかげさまで復興へ向けて少しずつ前に進んでいる。

人)は谷あいに広がる棚田や茶畑、山々がとても美しいところだが、今回の災害によりあちこちの道路が寸断され、一時は孤立状態となり、農地や家屋に甚大な被害がもたらされた。黒木町内で約3,300箇所の農地が被害を受けており、そのほとんどが笠原地区。今後、笠原を離れる人、農業をあきらめる人が多く出てくるのではないかと心配だ。

そういつた中で、ボランティアの存在は強く地域を励ましてくれた。災害当初は民家や側溝の泥だし作業が中心だったが、9月以降は棚田や茶畑、用水路などの農地復旧



を行ってきた。暑い日も寒い日も、泥と汗にまみれながら行う復旧作業の様子は、「二人じゃない、笠原には応援してくれている人達が沢山いる。」というのを伝えてくれる。中でも地元の中学生や高校生が夏休みや週末を利用して駆けつけてくれたときは、地域全体が明るい笑顔につつまれた。



山村塾は1994年に「都市住民と農山村住民とが一体となり、棚田や山林といった豊かな里山などの山村環境を保全する」ことを目的に、棚田保全を旨とする稲作コース(椿原家)という

これまでの山村環境を保全する「ことを目的に、棚田保全を旨とする稲作コース(椿原家)という...」

山村塾 http://www.h3.dion.ne.jp/~sannsonni/
黒木町笠原の近況 https://facebook.com/kouta.komori

【編集後記】

水害から半年の1月に発行予定でしたが、パソコンが12月20日になって壊れ、真っ青になりました。新しいパソコン・Win8は使い難いうえ、残っていたデータを探しだしての編集まで、一か月遅れの発行となりました。被害に遭われた流域の皆さんは、パソコンも、大事な思い出のモノも失われた方も多いと思います。改めてお見舞い申し上げます。

黒木

子供たちの通学のことを考えると八女に降りるしかないと考えられる間も多い。どれだけ茶専門でやっていく気持ちはあるかどうかによるのかも。玉露は生産量が半分になるかもしれないね。

矢部川水害

流域住民の声



星野川水車公園付近(下が下流) (大成ジオテック株)

うな流れ(段波)が流下して二次災害を引き起こすことがある。 今回の洪水でも、笠原川の霊巖寺上流や星野川の上陽町水車公園付近など数か所で、山腹が崩壊して河道を閉塞、大量の杉林もろ共一気に濁流となつて流れ下つた痕跡が見て取れる。

ループが、流れ下つて来る山津波に車ごと巻き込まれた。幸い、車を放棄して、全員が一命を取り留めた。(八女市職員からの聞き取り) 御境川の川絵図から見る先人の知恵

江戸時代の後期、安政年間に描かれた長さ二十尺にも及ぶ御境川(矢部川)の川絵図。この絵図から、様々な先人の治水に対する知恵や工夫が読み取れる。

今後の矢部川における治水の在り方

現計画での河道整備を早期に完成することは、技術的にも財政的にも極めて難しい。超過洪水に対しては、一層、対策は困難である。さらに、山間部における、地質の風化、植生の成長、農林業の開発、内水排除対策、治山治水施設の整備などが、下流域の洪水流量の増大要因ともなる。このようなことから、堤防決壊、土砂災害、内水浸水などは今後も繰り返されることを前提に、人命財

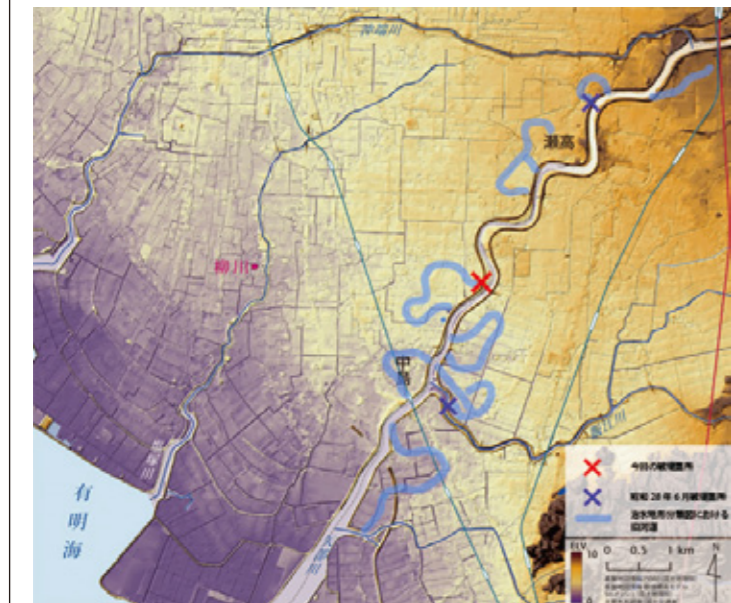


図4 矢部川決壊箇所地図 地図調製:株式会社東京地図研究社



図3 「大和町の歴史P60」から

日頃は幽玄で静寂な矢部川も、一転、稀にはあるが恐ろしい牙を剥く。 今回の豪雨災害は、改めてそのことを思い知らせた。自然がもたらす豪雨も地球の営みの一つ。人間はちっぽけな地球の生き物。氾濫や土石流を完全に無くするなど大それたことを期待したり計画したりすることはしよせん無理がある。人間のおごりを捨て、自然の猛威とも共存する心のゆとりを持つこと。そのことが、今回の災害を通して流域住民に問われているのでしよう。

おわりに

行政に頼らない地域連携による避難計画の樹立、自らの命は自らで守る自主性の確立、防災知識についての教育啓蒙、情報伝達手段の整備、災害情報の蓄積活用などが急がれる。

はじめに

平成二十四年七月十四日、矢部川流域は今までの経験したことがないほどの豪雨災害に見舞われたが、その一カ月ほど前に、私は、「矢部川は安全か? 想定外を想定する」という演題で講話したばかりであった。その講演で警鐘した矢部川水害の事象の数々が、僅か一カ月後には現実となった。

矢部川は、過去にも、大正十年、昭和二十八年と、今回に匹敵するほどの豪雨災害に見舞われてきた。この百年間で三回もの豪雨災害。その背景と問題点、今後の対応策などについて、以下私の所感を述べる。

激甚な水害はなぜ起きたのか

なぜ豪雨災害は起きたのか。一言でいえば、想定外の豪雨と矢部川の貧弱な治水施設。

今回の豪雨発生メカニズムについては、気象庁がいち早く解明。北と南の高気圧のせめぎ合いの境界に横たわる梅雨前線上のバックビルディング形成によると発表。

一方、国の整備計画(案)によると、矢部川は、計画流量三千m<sup>3</sup>/秒に対して二千八百m<sup>3</sup>/秒の暫定計画流量を安全に流下させることを目標として整備がなされている途上であった。四千m<sup>3</sup>/秒のピーク流量とも推測される今回の洪水には、到底及ばない小さな整備

六合の堤防は、なぜ決壊したか

目標であった。

柳川市六合の堤防決壊箇所は、江戸時代初期に蛇行した河道を捷水路化(ショートカット)し、その旧河道が有明海から満潮時に運び込まれる超軟弱な濁土によって自然に堆積した後、旧河道入口



柳川市六合(松尾千代美さん宅から撮影・チューブから)



決壊した矢部川 (大成ジオテック株)

を締め切った箇所である。現在の六合地区堤防は、昭和二十八年の大洪水後に、川幅を拡げるために水田を潰し、延長五百メートルにわたり新たに築かれたものである。そのため、旧河道を横切る部分の堤防地盤は超軟弱なままであった。その堤防に、今回、計画を上回る高水位によって想定外の荷重が長時間かかり、それに耐えられず堤防下の軟弱な地盤が滑り層(円弧滑り)となつて、一気に堤防が滑動破壊し

たものである。堤防のすぐ傍にお住まいの松尾千代美さん(自宅は浸水)が、堤防が一瞬にして陥没崩壊する様子を目撃されていた。

笠原川、星野川を、山津波が駆け下つた

渓岸や河岸で深層崩壊(地すべり性のもも含めて)や大規模な土石流が発生すると崩壊土砂が河谷をせき止め、土砂ダム(天然ダムとも



星野 2012.7.22 (松富士)



笠原川霊巖寺上流(右が下流) (大成ジオテック株)



新幹線船小屋駅周辺・筑後広域公園広域公園は大きな水瓶 (大成ジオテック株)

### 公園や水田の遊水機能と下流域の被害の軽減

筑後広域公園は、矢部川の水量が増し沖端川に過剰な水が流れ込んだ場合遊水機能を持つてい

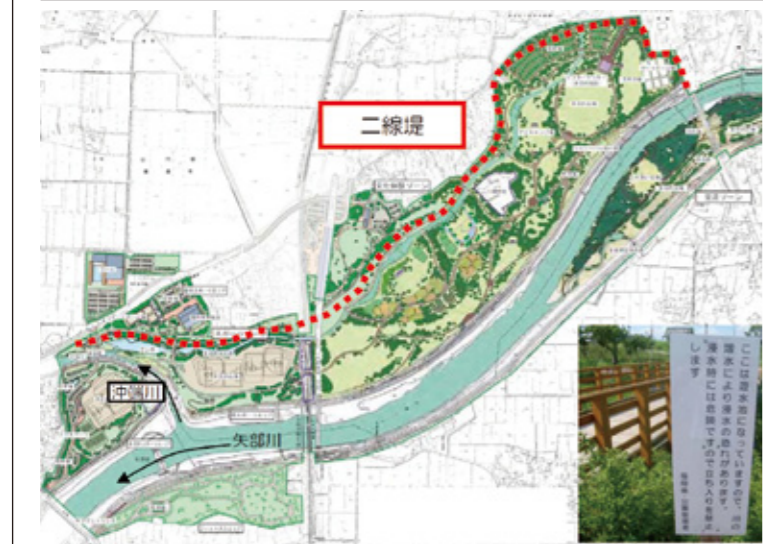


図6 矢部川、河川整備の実施 国土交通省資料より抜粋

る。図の二線堤で囲まれた部分は、最悪の場合水没し、下流域の増水による事故を軽減する。ところが、水だけではなく、矢部川水害の場合は大量の流木および、ヨシなどの漂着物も遊水池に流れ込んだ。この二線堤の設

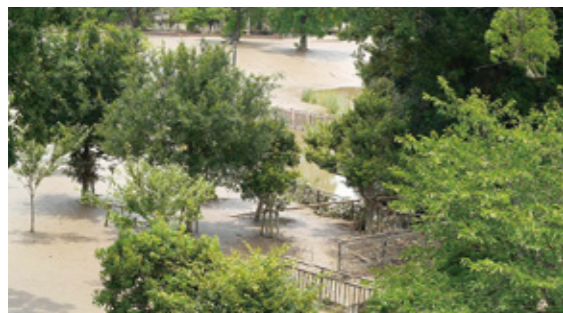
置は少なくとも大正3年(1914年)以前である(国土交通省松井さんより)。江戸時代に沖ノ端川が整備されたときに設置された可能性もある。先人の知恵に学ぶべきことが多いのではないかと感じた。



川の駅船小屋 恋ぼたも冠水 2012.7.14 (庄山)



広域公園遊水池グランドでは最大20cmの土砂が堆積した 2012.8.9 (木庭)



いこいの森公園にも泥流が流れ込む 2012.7.16 (木庭)



広域公園内の流木と漂着物 2012.7.16 (木庭)

能を持つ公園や決壊時刻と有明海の干潮時刻が重なったため水田とクリー

クが遊水池の役割をはたしたのではないかと考えている。

# 矢部川水害漂着樹種及び崩壊地植生調査

木庭 慎治(国土交通省河川環境保全センター、八女高校教諭)

## はじめに

上流から下流までスギ・ヒノキの流木が非常に多く、そのほとんどが根を付けていた。また、樹皮が削られており、様々な構造物に激しく激突し流されてきたことが予想された。そこで、2012年8月9日に漂着した流木の樹種調査と上流域の斜面崩壊地の植生調査を行った。山間部の崩壊した斜面の多くがスギ・ヒノキの植林地でしかも河川が曲がり、激流が直接ぶつかり、水と流されてきた石や木材によって浸食される地形に集中していた。

り、降雨は土壌表面に染み込む暇なく一気に流れ、河川の急激な水量変化を招く。

## I 矢部川水害漂着樹種調査



宮野公園 2012.7.16 (木庭)

スギ・ヒノキ流木に根が付いており、上流域に起こった崖崩れによって

根こそぎスギ・ヒノキが倒れ、そのまま川に流れ込んだことが考えられる。8月9日の調査では、漂着した流木のうち、スギ・ヒノキの占める割合を算出するため、根の付いた流木株を全て数えた。



星野川・山内橋～板付橋間(畑に丸木散乱) 2012.7.17 (松富士)

117本もひしめいていた。根は広葉樹に比べ小さく、スギ・ヒノキの植林では、ほとんど地盤を固めるために役立っていないことがわかる。

調査場所	スギ・ヒノキ	広葉樹	スギ・ヒノキ率
筑後広域公園	17本	1本	94.4%
溝口樋管	16本	0本	100%
宮野公園	116本	1本	99.1%
合計	149本	2本	98.7%

表2 矢部川水害漂着樹種調査(木庭)

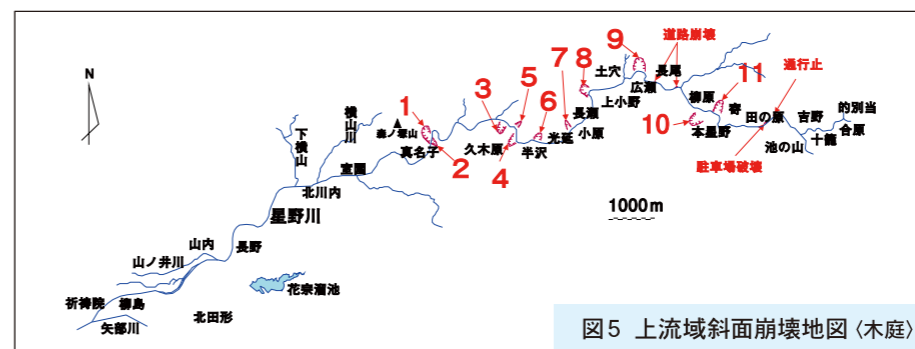


図5 上流域斜面崩壊地図(木庭)

## II 上流域、崩壊斜面の植生調査

崩壊場所周囲の植生と、滑落した枝、葉などの植物体より推定した。確認しただけで11カ所の斜面崩壊を確認した。次の赤字の番号が崩壊地点。

崩壊場所	斜面崩壊地の植生	崩壊場所	斜面崩壊地の植生
1 真名子右岸	スギ、ヒノキ	2 真名子左岸	スギ、ヒノキ
3 久木原左岸	スギ	4 半沢左岸	スギ、モウソウチク
5 久木原右岸	スギ、モウソウチク	6 横尾右岸	スギ、自然林
7 小原右岸	ヒノキ、林道から崩壊	8 小野右岸	スギ、ヒノキ
9 広瀬右岸	スギ、ヒノキ、モウソウチク、雑木林	10 柳原左岸	スギ、ヒノキ、茶畑、雑木林、林道から
11 本星野右岸	スギ、ヒノキ、モウソウチク、雑木林		

表3 上流域斜面崩壊地の植生(木庭)



筑後広域公園横におかれた大木の根元 2012.7.23 (松富士)

ひふみよ橋を守る取り組みについて

ほたると石橋の館 辻田 理絵

人に自然に優しい町“をキヤッチフレーズとする八女市上陽町には、星野川の清流に一連の洗玉橋、二連の寄口橋、三連の大瀬橋、四連の宮ヶ原橋と上流から順序よく石橋が架設されています。これらの石橋群を私たちは、「ひふみよ橋」という愛称で呼び親しんでいます。



寄口橋(2連) (辻田)



大瀬橋(3連) 2012.7.17 (松富士)

このように、ひとつの川に一連から四連までの石橋が順序よく並ぶ姿は全国でも上陽町でしか見られない光景です。この「ひふみよ橋」を含め現

存する13橋の石橋をきれいにするため、平成7年から毎年1月に住民による石橋美化活動(全10回)が行われ、平成17年3月には住民代表から「上陽町石橋群の県指定文化財要望書」が県知事あてに提出されています。



宮ヶ原橋(4連)周辺 (辻田)

千付近まで水位が上がると河川一帯が増水。四連の宮ヶ原橋は完全に水没。星野川に架かるコンクリート橋が流失するという状況の中で、「ひふみよ橋」は最大の危機に直面しました。

しかし、水が引いた星野川には美しいアーチを誇る「ひふみよ橋」が毅然とした姿で残っていました。この神々しいまでの姿に、住民みんなが石橋の強靭さに驚き、架設当時の技術の高さに感嘆しました。

私たちは、豪雨以来、通行止めとなり住民生活に支障をきたしている

「ひふみよ橋」の早期復旧を願って活動するため、八女上陽の「ひふみよ橋を守る会」の設立に向け準備を進め、9月18日(火)午後7時から八女市上陽町のほたると石橋の館で八女市内外から約60人の賛同者の参加のもと設立総会を開催しました。

現在、会員数は109人です。現在も「ひふみよ橋」は通行止めであり



宮ヶ原橋周辺の状況 (榎大成ジオテック)

ますが、福岡県や八女市当局では、被災した石橋の健全度調査を行うなど、早期復旧と保存のための検討を進めてあり、八女上陽の「ひふみよ橋を守る会」も引き続き保存活動に力を入れ、未曾有の洪水を耐え抜いた「ひふみよ橋」を復興のシンボルとして、八女の元気を広く発信して行きたいと考えています。

矢部川 水害記録

流域住民の声

星野村

星野村に来るのには迂回がまだ必要だから店舗に来られるお客様は減ったけれど、通信販売でも何でも商品をお届けしていきたいと思う。(商店店主)

迂回路の冬場の凍結が心配。星野村では早ければ12月頭から雪が降る。この道は冬はスタッドレスタイヤや四駆で通っているような道だから。

昔は山から材木を運び出すのに谷から谷にワイヤーを張って木をおりしていた。現在は切り出し用の道が整備されたが、その道幅の分だけ削られて山が弱くなった気がしてならない。

矢部川 水害記録

流域住民の声

立花町

幸いにして家は何の被害も無かったけれど、みかん畑の半分が流されてしまった。生活のことを考えるとどうしたらいいのやら。年も年だし後継者もないから、またやり直すことは考えにくい。

飛形山に良い道が出来たのはありがたいけれど、山に降った雨が道路を通って仁合川に集まっているように思われる。本当のところはわからないけれど。

八女

昭和28年の水害の時はこんなに流木が多くはなかったと思う。橋やら堤防やらが流木に削られたことでの被害も大きいんじゃないかね。

マスコミの報道を見ると、堤防の決壊した柳川や孤立した星野村など象徴的な所ばかりが報道されて、自分たちの地域は皆から見捨てられてい

柳川

大豆がちゃんと育っているように見えるけれど種まき時期が遅れたため背丈が低い。豆は地面に近いほうから育つので一番大きな豆の鞘は刈り切れない。収量が落ちるんじゃないかと思う。

もともと集落が低くなっている昭和28年の水害でも浸かったから、この辺りの家はとくにかく基礎を高めにしていて庭先までは水が入っても玄関には入らなかった。

種を撒く前に何度か耕している除草剤無しでもそう草は生えないものだが、今年は見えたこともないような雑草が大豆よりも高く高く生えた。洪水でタネと栄養分が運ばれてきたのだろう。

ビニールハウスの復旧などに補助が出るのはありがたいが、復旧に時間がかかるのは土。

これまで堆肥や資材を入れて何年もかかってき

みやま

た土づくり。この土に洪水で土砂が入ってしまった性質が全く変わってしまった。土を元に戻すための土壌分析などにも行政の支援がある。

水に浸かった海苔関係の機械も応急処置が終わった。大水の後ほたいがい海苔は豊作になるが、今回は特に豊作になってくれないと代金のあてがつかずに本格的な機械の修理が出来ない。

水がひいて何日かして近所の犬がどうも調子悪そうにしていただけ悪臭という何かガスみたいなものが残っていたへド口から出てたんじゃないかな。結構、気分が悪くなつて救急車で運ばれる住人やボランティアがいたのも、同じ原因だと思ふ。

同じように水害の被害にあっても住宅や自動車の保険に入っていたか入っていないかだったので、本当に明暗がわかれた。保険に入る余裕のないような生活をしている人ほど困難に直面しているのが現状。



八女市山内地区(福消ヘリ撮影) (八女市)



消失前の唐ノ瀬堰(馬場)



消失後の唐ノ瀬堰(馬場)



茶畑に流れ込んだ土砂(星野村縫尾) (八女市)



矢部川河口・打ち上げられ壊れた船 2012.7.23



矢部川城崩壊 2012.7.14 (松富士)



沖端川河口に流れ着いたゴミ 2012.7.23